

植物の写真をうまく撮る際の‘役に立つかわらない’覚書 其の六の其二

レンズの構成 第69号ではレンズの種類について単焦点・ズーム、広角・標準・望遠およびマクロの分類で述べた。ここでは、レンズの構成について考えたい。

実は、カメラのレンズは一枚でできているのではなく、何枚かのレンズが組み合わさって作られている。ここで、Carl Zeiss 社が世界最高の標準レンズとして位置付けている Zeiss Otus のカタログ¹⁾をみると、そこにはレンズ構成（枚/群）として 12/10 と書かれている。これは、12 枚のレンズと、何枚かのレンズを組み合わせた凹凸レンズ化した群が 10 つあることを示している。図にその Otus 1.4/55 のデザインを示す。これをみて分かるように、複雑に各レンズを組み合わせることで、一つのレンズができて

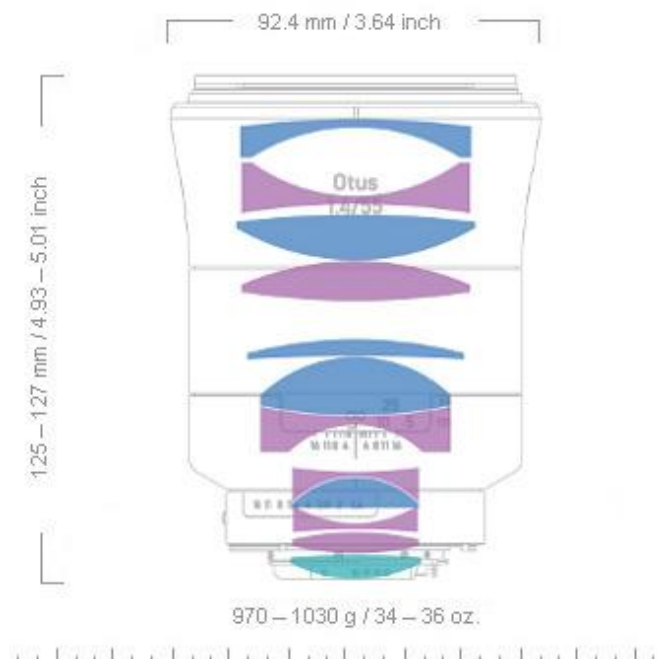


図 Carl Zeiss 社の Otus 1.4/55 のデザイン¹⁾

いることが分かる。この中でも二つのレンズがくっついてるのが、いわゆる群となる。

Carl Zeiss 社の歴史は古く、創立は 1846 年まで遡れる²⁾。

日本の Nikon 社や Canon 社も光学業界として歴史は古いものの、光学機器の会社の歴史からすれば、さすがに Carl Zeiss 社には勝てない。Carl Zeiss 社は、いわゆるこの業界の老舗である。ちなみにカメラ会社の歴史からみると、Leica 社も外すことはできない。こちらは前身となる Optisches Institut が 1849 年に創立されている³⁾。どちらもドイツの会社である。Carl Zeiss は知らなくとも、Leica は耳にしたことがある人も多いに違いない。豆知識として、画像センサーの Full Frame の基準となった 135 フィルム（35mm 判）は、Leica 社のカメラが広めた

ともいえ、35mm 判はライカ判と呼ばれることもあった。一般の人にはとても縁がない（とても高価な）Leica 社のカメラではあるが、Leica はカメラ業界の歴史から、カメラ界の巨人とも言えよう。

一方、光学業界では歴史が古い Carl Zeiss 社ゆえに、レンズの構成の名も Carl Zeiss 社やその関連が端を発しているものが多い。テッサー、プラナー、ビオゴン、ディスタゴン、ゾナー、ホロゴンなどがそれぞれある。この名を聞くと、何かのアニメの怪獣名なのかと思う人もいるかもしれないが、これらはすべて Carl Zeiss 社のレンズ名で、レンズの構成の名でもある。ちなみに、前述の Otus 1.4/55 はディスタゴンにあたる。

今やスマホで簡単に美しい写真が撮れるようになったため、レンズだけでなく、カメラ自体も業界としてはニッチな産業になりつつある。しかし、少しでも高画質で植物を撮るには、やはりいいレンズの付いた単体のカメラで撮りたいと思うのは、老驥伏櫪になるのだろうか。

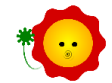
懲りずに次は写真のレタッチについて述べたいと思うが、これもいつ発行になるかは分からない(*´ε`*)。

1) http://www.zeiss.co.jp/camera-lenses/ja_jp/camera_lenses/otus/otus1455.html（閲覧：2015.6.29）

2) <https://ja.wikipedia.org/wiki/カール・ツァイス>（閲覧：2015.6.29）

3) <https://ja.wikipedia.org/wiki/ライカ>（閲覧：2015.6.29）

植
い
き
新
聞



植物いききサークル

第71号

発行者:犬丸